

サラリーマンA・B・C・DとK

源氏鶏太

東方社版

サラリーマンA・B・C・DとK

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十一年六月五日発行

定価四二〇円

著者 源 氏 鶏 太

発行者 石 渡 磨 須 子

製版者 磯 貝 兌 雄

東京都文京区高田豊川町六〇

発行所 東 方 社

振替東京五七七四番
電話(四三)四四五一一四番

(印刷・邦文堂印刷所)

サラリーマン

A・B・C・DとK

源

氏

鶏

太

目次

大 朗 報	万 事 窮 す	社 長 の 娘	サ ラ リ ー マ ン A・B・C・DとK
103	71	33	5

赤の他人

次女の結婚

四十初惑

大阪の宿

あとがき

129

163

183

213

243

装
幀

秋
山
庄
太
郎

サ
ラ
リ
ー
マ
ン
A・B・C・D
と
K

夜のそう混んでいない郊外電車に四人のサラリーマンが乗っていた。だいたい三十五、六歳である。子供の一人や二人はありそうな顔つきをしている。四人同じ会社勤めていた。何処かで飲んで来た帰りらしく、いつもより多少口が軽くなっているようであった。勿論、それぞれに親からつけて貰った名がちゃんとするのだが、かりに、A、B、C、Dとしておこう。その方がこの小説の性質上も読者にわかりやすい筈だと思ふから。

「今夜は、どうも面白くなかったなあ。」

Aがいつた。

「でもなかつたらう？ 君は、随分と愉しそうにしていたじやないか。」

Bがやや皮肉な口調でいつた。

「僕にもそう感じられたな。」

「そう、僕にも。」

CとDが殆んど同時にいつた。

「すると君たちは、いつたいどうだったんだ。」

Aが憤然とした口調で逆襲するようにいった。

「面白い筈がないじやアないか、あんなケチな課長におごられて。」

「そもそもあのおごり方が気に入らないよ。たかがおでん屋でビールをご馳走してくれて、それも思着せがましく、さ。いいかね、課長には交際費が出ているんだよ。その交際費には部下慰勞費も含まれているのだ。だから課長たる者は、ときどきその交際費で部下をご馳走する義務があるのだ。したがって、われわれにはその権利が。何も特別に頭を下げる必要がないのだ。尤も、頭を下げないところ機嫌が悪いから仕方なしに僕だつて下げてはいたけどね。」

「しかもだ。それに話といえば、自分の昔の自慢話苦勞話ばかりだろう？　もう何度も聞き飽きた話ばかりだ。それを如何にも初耳のような顔をして傾きながら聞いている辛さ。その上で、だから君たちも、とくる。察して頂戴よ、といたくなくなってくる。」

BとCとDがそれぞれいった。

「それだつたら僕も全く同感さ。しかし、四人もいて一人ぐらいはしやいだ顔をして、課長課長といわなきやア悪いじやアないか。だからこれでも犠牲者になつたつもりでいたんだよ。」

Aがいった。

「そりやアまア認めてもいいがね。しかし、課長は、僅か五千円ばかりに領收証を貰つて帰るのを見たらう？」

「見たよ。」

「あんな領収証、何んの必要があると思う？」

「さアね。帰つてから奥さんにでも見せるつもりなんだろう、今夜の証拠にね。」

「僕は、違ふと思うね。あの領収証は、この次のどこかの接待のときにぶち込んでしまふためだと思ふな。」

「しかし、それだと日付が……。」

「あんなもの訂正するの訳はないよ。」

「ふーん。とにかく嫌な課長だよ。今夜だつて、後もう一軒どこかをおごつてくれるのだと思つていたら、僕にちよつと用があるから失敬、といつてさつさつと行つてしまふ。途中で放り出されるこつちの身にもなつて貰いたいね。」

「だいたいあの課長は、人使いが荒いよ。威張りたがる。部下の仕事について責任は取らぬ。」

「その癖、上に対しては、もうペコペコばかりしている。」

「所詮、課長の器うつちではないな。」

「同感だ。」

「全く。」

「ところが課長の奥さんは、今でも部長の家へしよつちゆう出入りしているんだよ。」

A が得意気にいつた。

「本當かい？」

「そうさ。部長夫人のお供で買物に出かけたり、大掃除のときにはお手伝いに行つたり。」

「課長夫人になつてもそんなことをしなければならぬのかい？」

Bがうんざりしたようにいつた。

「要するに早く抜群ぼつぐんの出世がしたいからさ。」

Aが答えた。

「僕は、それほどまでにして出世がしたくないよ。第一、それでは女房が可哀そうじゃアないか。」

Bがまたしてもいつた。

CとDは、黙つて聞き役にまわつてゐる。それに気がついてBも、黙り込んだ。が、Aは、

「あの課長がね、部長といつしよに出張したときなんか、ひどいもんだそうだよ。まるでホウカンのように仕えるんだそうさ。情ないね、そんな課長に仕えているなんて、われわれは。だから、こつちだつて課長のお供で出張するとき、やつぱりホウカンのように仕えないとご機嫌きげんが悪いんだ。しかし、僕は、嫌だね。この前いつしよに九州へ旅行したときなんか、僕は、あくまで毅然きぜんとしていたんだ。そうしたら君は、いつたい何んのために僕について来たのだといつて叱なぐられた。僕は、余つ程、社員であつてホウカンでありませんといつてやろうと思つたんだが、まア我慢したよ。」

Aは、そこまでいつて、自分だけがいい気で喋りまくつてゐることに気がついては、はつとしたようさだ。何んとなく三人の顔色を見るようにした。しかし、三人は、知らぬ顔をしている。Aの顔に狼ろう狽ばいの気配が現われて来たようさだ。

「しかしだよ。」

Aがいった。

「僕は、何んの彼んものというけど、本当は、あの課長が好きなんだ。」

「そりやア僕だつて。」

「そりやア僕だつて。」

「そりやア僕だつて。」

BとCとDが異口同音にいった。Aは、更に、

「とにかく、今夜だつて、おごつてくれたんだしな。」

「そう。」

「他の課長は、あんなことをしていないらしいよ。」

「そう。」

「いい課長の方だよ。」

「そう。」

「割合いにエコヒイキしないしな。」

「そう。」

電車は、徐行しはじめた。Aは、窓の外の方を見て、

「あ、次は、僕の降りる駅だ。」

と、あわてて立ち上り、

「じやア、失敬。明日また……。」

と、いいながら下車していった。

二

電車が動きはじめた。残されたBとCとDは、しばらくそれぞれの思いに耽^{ふけ}つていたようであつたが、やがて、Bが、

「Aの奴、急に課長が好きだなんて心にもないことをいい出して、笑わせやアがる。」

「そうなんだよ。」

「きつと、僕たちが告げ口でもするかと思つたんだろう。」

「そんな卑怯な僕たちぢやないよね。」

「当りまえだ。」

「しかし、Aの奴、そういうふうにしたということとは、あいつがそれをしているからかも知らないな。」

「だから今後、Aの前で、課長の悪口をいわない方がいいかも。」

「同感だな。」

「Aがね。」

と、Bがあらたまつた口調でいつた。

CとDは、聞き耳を立てた。

「さつき、課長と旅行したとき、ホウカンの真似をしなかつたといつたろう？　ところがあれは大嘘なんだ。」

「本当かい？」

「僕は、その後でおんなじ旅館に泊つて聞いたんだよ。女中があんな世話は、奥さんだつて出来ないでしょうね、といつていたから。」

「たとえば？」

「課長がお風呂に入る前には、Aが自分で湯加減ゆかへんを見たり、朝は課長よりも三十分以上も早く起きてちゃんと身じまいをしていて、課長が起きたとわかるとさつと新聞を持つて入つて行つたそうだ。」

「へええ。」

「課長がアンマがしたいといつたんだそうだ。ところが、生憎あいにくとなかなかアンマがこないんだ。すると、Aが、課長に僕がおもひましようといつて、実際にもんだというんだ。」

「もむ方でもむ方だが、もませる方でもませる方だな。」

「まさに、サラリーマン哀話だな。」

「ところが、Aは、そう思っていないらしいんだ。今日のおでん屋でだつて、課長課長と齒の浮くようなお世辞せじを並べていたろう。あとで何んとか理屈をつけていたが、本来はああいう男なんだ。」

「僕もそう思つたな。」

「Aが、課長夫人がしよつちゆう部長邸へ出入りしているといつたろう？」

「うん。」

「その実、自分の細君をしよつちゆう課長邸へやつてゐるんだよ。」

「本当かい？」

Cがいつた。

「そうさ。」

「君は、どうしてそういうことを知つてゐるんだ。」

「まア、それはいえないがね。」

Bは、あいまいにそういつておいて、

「しかし、君たちだつて、Aがこの前の昇給が特別によかつたのを知つてゐるだろう？」

「うん。あのときは、僕も腹が立つたなア。」

Dがいつた。

「僕だつてさ。しかし、Aがわれわれよりも仕事が出来るといふのなら別だ。公平に見て、われわれ三人の方がずっと上だ。にもかかわらず、Aだけがよい昇給した。当然、何らかの理由があると思つていいだろう？」

「そう。」

「お世辞のお蔭さ。ホウカンになつたお蔭さ。自分の細君を課長のところへ出入りさせているお蔭さ。僕なんか、絶対に嫌だね。そんなにまでして出世がしたくない。男一匹が泣く。第一、それでは女房が可哀そうだよ。」

Bが昂然としていつた。CとDは、頷いてみせた。

「僕はね、Aなんかに目をかけている課長がだらしがないと思うんだ。さつき、あいつのいつたことを全部課長に聞かせてやりたいくらいだよ。勿論、僕は、そういう同僚どうりょうを裏切るような真似は、絶対にしないがね。」

「そりやア僕だつて。」

「勿論、僕も。」

「しかし、Aは仕方がないとしても、われわれ三人だけでも、あくまで仲良くしていこうじやアないか。」

「いいね。」

「いいね。」

「近くわれわれ三人だけで飲もうか。」

「賛成だ。」

「しかし、Aの奴、今頃われわれ三人からこんな悪口をいわれているとは知らんだろうなア。それをも思ふと愉快になる。」